

授業方法について独自に工夫していること【創造科学系】

学習管理システムに授業資料をすべて掲載し、課題提出と採点結果の確認、日常的な連絡も同じシステムを用いて利用できるようにしている。クラウド上に構築されたもので、モバイルアプリも提供されているため、学生はPCを利用する授業では、各自のスマートフォン画面で操作内容を確認しながら学習を進めることができる(演習、実習科目の場合)。授業内容では、情報Ⅰでは学生たちにワークシートや教材を触って試行錯誤させ、考えを共有しあうアクティブラーニングを志向し、ソフトウェアⅠでは統計的な考え方の把握を中心としたExcel操作を演習し、プログラミング実習Ⅰではこの授業用に開発した計測制御基板を用いて、基礎的な内容から発展的な様々なアイデアを実現するプログラム作成を行う。

学生とのコミュニケーションを重視している。特に「情報Ⅰ」と「ソフトウェアⅠ」は1年生の最初の授業であるため、ひとりひとりの学生の特徴把握に努め、少人数であることを活かし、発問に対する指名や、発言に基づく授業展開を意識的に行っている。授業時間外でも学習管理システムに補足的な資料の提示を随時行い解説を行ったり、学生からの連絡に対してできるだけ迅速な対応をしたりする心がけている。「プログラミング実習Ⅰ」は中学校技術の次期学習指導要領でも強化される分野であるため、全員の共通認識が高まるよう、提出させる課題は「みんなを楽しませる作品」とし、次の授業で公開レビューを行い、その場で相互評価し、教員のコメントを加え、合議により採点を行った。最終課題は夏休みにかかったが、お盆休みも毎日寄せられた質問に公開で考え方を提示する形の回答をし、全員の意識を高めるようにした。

ピアノ1については、個人の中での学習だけでなく、グループとしてお互いのピアノを聴きあったり、意見交換をしたり、悩みについて検討していくことで、これまでの一人で学ぶピアノからの脱却をねらっている。ピアノ実習については、単にピアノを弾くということではなく、授業の中でのピアノの活かし方や、ピアノを用いながらの授業では、ピアノを弾くということに加えてどのような力が必要なのか、何を考えておかななくてはならないのか、という点について考えられるように工夫している。

主体的な学びを行うような課題を作って、アクティブラーニングになるよう工夫している。

実技を取り入れた授業ということもありますが、学生が主体的に活動できるように授業の始めのイントロダクションに重きを置き、その日のめあてを明確にしたうえで学生が授業を創っていく雰囲気重視している。

授業の資料は初回開講時にすべてネット上に提示し、いつでも必要な資料をダウンロードできるようにしている。図版入りのノートを配布し、各自が作品同士の有機的な結びつきを探れるよう工夫している。

授業では、過去に報告されている研究レベルで明らかな内容(図表等)を提示することによって、学生の理解を深めるよう努めた。

ゲーム時間と振り返りの時間を確保するために、それ以外の活動をルーチン化して授業効率を上げています。授業ノート(保存版)を作成し、教員になったときもそのまま教材資料として活用できるようにしています。

グループワークによる学習を軸にして授業を組み立て、教え合い活動を促すようにした。

- ① 授業内容の構成が、教師としての授業づくりそのものになるように、球技の単元構成や1単位時間の流れを加味して運動教材を配列した。
- ② 前半は指導内容を具体化する教材づくりの紹介と実技、後半は前半の内容をふまえ、ねらいに即した教材づくりを課題とし、全体で共有化した。
- ③ 実技では扱えない内容は紙面資料として配付した。
- ④ 学習形態を全体・チーム・ペアの3段階に分け、効果性と効率性を図った。そのまま学生が教育実習ならびに現職教員になったときの授業づくりの留意点とした。

スポーツ医学: パワーポイントを使用し、できる限り多くの資料(図、絵)と動画を用いて説明を行っている。

これらの授業は、小中学校の音楽教員として学校内音楽活動(合唱コンクールや学習発表会、音楽系部活動等)を担うために必要な知識と技術を身に付けるものであるが、広く一般の音楽教育(お稽ごとや一般音楽団体等)に関わる事柄にも興味関心を抱かせるように工夫したつもりである。
概ね、受講者には受け入れてもらえたと判断しているが、「難易度が難しすぎる」と回答した者が若干名いたことから、「難易度を落とす、内容を簡単なものにする、課題の量を減らす」等を検討している。しかし安易な方向へ合わせていくことに疑問を感じている。

ピアノ演奏を通じて、音楽の中に内在する、人間の心や考え方を知り、精神の向上や癒し、計画性などを音楽の中から読み取り、それを楽譜に書いてくる自宅学習をして、それを携帯で映像に加工して、授業のたびに、それを発表させながら演奏にのぞんでもらっている。元来、音として消えてしまう音楽に学生同士が内在する音楽の共有して、勉強意欲を高める工夫をしている。また生徒ひとりの完成を大事に保ちながら具体的奏法を伝授している。

昨年度までは、3年生で開講していた授業で、本年度から1年生で開講することになった。よって、受講者は電氣的基礎知識がないと考えられる。特に電磁気学的な基礎知識がないと考えられる。そこで、シラバスで述べている項目より量的に減らし、平易に話すように心がけた。特に受講者とのキャッチボールを多くし電気材料して基礎的な知識習得の定着を図った。また、時間をロスする小テストを辞め、課題レポートを多くした。なるべく授業を楽しくするため、最近の電気材料関係のトピックスを織り交ぜて授業を実施した。

実習であることより、基礎的な理論は受講者が既に一定レベルに達していることを念頭に、シラバス通りに授業進行を進め、受講者が前もって調べ学習をできるように前時にやるべき内容を伝えておき、電気パーツ等を自分の責任のもとで購入し、手に入れるようにしている。課題解決に向け学生同士が議論し合って解決できるように授業者が極力介入することを控えた。よって、実習中にPC、タブレット、スマホ等による検索なども許可した。最後に、まとめ的な課題として、自由作品を企画・設計・製作させた。

実技の授業において、自分の遂行している動きと自分の感覚のズレを実感させるために、運動遂行直後に自分の動きを最初から見るができるように、遅延映像装置を用いたビデオフィードバックを学習者に提供している。

1. 下見の実施
2. 野外環境の創設
3. 学生との対話形式による実施内容の企画立案

描き方をきちんと教えてもらえれば自分でも描けるということを体験させるように努めている。自分で描けないような絵を学校現場で子どもたちに教えられる筈はないので、道具の置き方や物の見方、描き方を教えている。小学校図画工作科における題材数は、決して少なくないので、時間をかけて少しのテーマを扱うのではなく、15回の授業の中で10のテーマについて描き方と教え方が学べるように授業を行っている。出欠は毎回の作品提出でチェックしている。また、学生たちは自身の絵の具を持参させると、小学校の児童たちと同様にパレットに僅かな絵の具しか出さず、それが絵を描くうえで失敗の原因につながりやすいため、授業者が絵の具と画用紙を持参して、好きなだけ使えるように配慮している。(絵画基礎) 風景画を描く際の場所選び、構図の作り方、着色方法に重点を置いて実地指導を行った。(風景写生)

授業が知識の一方的な伝達にならないよう、学生の反応を見ながら、適時、質問や議論の時間を取りながら進めている。

二次元から三次元に移行する過程で自らの矛盾に気づいたり、頭の中になかった造形に気づくような課題を出している。
例を示し、そこから何かを発見することで、自分の中になかったものを導き出せるように工夫している。

デザインに対する誤解を解き、表面的なデザインの思考ではなく、もっと広義で核に迫るような課題を出している。
新しい発想の仕方や「気づき」を求めること自体がデザインにとって大切であることを理解してもらうような工夫をしている。

出来るだけ具体的な事例を参考に上げながら説明をするよう努めている。

住宅設計がテーマの授業であるため、受講生ができるだけ実際に近い設計プロセスを体験できるように、演習課題を多く設けた。

工芸領域の授業の中で、それまで扱ってこなかった素材や制作工程を扱う授業にするとともに、受講生自らが制作時に試行錯誤できる内容と考えて授業を行っています。

本授業は、木工を学ぶ授業です。15回の授業の中で、木工の作品制作だけでなく、その制作に必要な道具や加工機械の基本的な使い方、安全面での指導、制作環境を整えることの指導等を扱っています。また大学生自らが制作することに限らず、子どもたちが木工を体験する際に必要な道具や加工機械の基本的な使い方、安全面での指導等も扱っています。また教材開発にも繋がる内容を扱うように心掛けています。

「美術史演習Ⅲ」は4年生対象のゼミであり、毎回一人の学生が各自で設定したテーマについて発表し、発表後に他の学生と質疑応答を行う。また、授業後に発表内容についてのレポートを毎回課している。学生の発表について、事前や発表後に適宜指導している。

「美術史現地指導Ⅲ」と「美術史現地指導Ⅳ」はそれぞれ3年生と4年生を対象に、夏期休業中に集中講義で京都・奈良や東京の社寺や博物館・美術館に赴き、美術工芸作品を現地で見学している。見学する作品について事前レポートを課し、見学対象についての関心を高め、理解が深まるようにしている。

担当科目はいずれも日本美術史の講義であり、独自に作成した授業資料を用意して学生に配布し、画像資料を作成して画像を示しながら説明を加えている。また、「芸術概論A」については毎時間、「日本美術史概論Ⅰ」と「日本美術史研究Ⅰ」については前期期間中に数度授業時間内に作成するレポートを課し、学生の理解度を測ると共に積極的な授業への参加を促した。

学生の理解度に応じてグループ分けをし授業を進めた。

指導した内容の理解度に応じてグループ分けをして指導。

学生の自主性に任せ、合唱曲を歌にあたって音とりからある程度の完成域まではやらせて、歌うことだけでなく、指導する方法も学ばせるようにしている。

この授業は家庭科免許用の教科であるため、必要最低限の知識の伝達をすることが必要であり、パソコンのパワーポイントで詳細な図示表示するのみならず、毎回の授業内容を簡潔にまとめたプリントを配付しながら授業を行った。

単なる講義では、なかなか知識として身に付かないので、前半には電気の基礎について講義し、その講義内容の確認テストを行い、電気の基礎理論あるいは基礎常識的な知識を確認し、後半では日常の中で使用されている電化製品を取りあげ、その動作原理や機構についての説明を行った。そして、後半には、自己調査をさせるため、課題レポートとして電化製品の機構や内部構造を調査させた。以上、基礎常識の確認と自己調査による製品の機構の確認をさせたことが授業法としての工夫である。

グループワークを多く取り入れ、学生自身が考え、学生同士が相談し合って、進めていく形を取っている。学生の関心が高いものや新しい発見ができる題材を用意している。筆記試験後、間違った問題を再度解き直し、提出してもらい、教員が採点するなど、復習の場を多く設けた。

油彩画初心者が多いことを考慮し、道具の使い方・絵の具の特性・西洋絵画の歴史等を紹介することにより制作に対する興味、理解が深まるように心掛けた。またカリキュラムの進行に合わせ、制作過程を毎時間ごとに写真記録しファイリングすることにより後の制作の一助とした。

映像資料を多く使い、文字情報だけでなく視覚・聴覚的にも感じ、理解を深めることのできる授業を心がけています。

また、授業内容において重要な資料だけでなく、教員・音楽家として知っておくべき事柄については幅広く紹介するように努めています。

個人レッスンの形で進めていくのですが、それにしては生徒数が多い授業なので、レッスンを受けていない生徒も興味を持ち続けられて、聞くことによって、また指導する立場にたつたらということも、生徒に投げかけながら進めていくようにしている。

・専用の道具が必要となる内容を扱うが、社会活動や教育活動で活かすためには使用する道具を自分で準備できる力が必要と考え、各自で簡単な道具を製作し、それをを用いて基本技法が学べるような教材づくりをしている。その際、安価で手に入れやすい材料を用い身近な文具や工具のみで作ることができること、また40名ちかい受講生が待ち時間なく同時に製作できることを満たすことができるような教材になるよう工夫している。

・資料などのプリント類に加え、作った道具や作品も同じA4ファイルにまとめて保存できるような工夫を行っている。